

## 宰平遺績

平成28年7月16日(土) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

広瀬幸平自らが綴った自伝に「半世物語」がある。そこには36歳以降の業績を中心として住友家での活躍を書いている。幸平の人間像を知るものとして、長男の広瀬満正が書いた「宰平遺績」がある。旧字体のうえに項目見出しもないので読みづらい文ではあるが、221ページを読み下して要約する。そして、別子銅山の危機を救い、産業の近代化を成し遂げ、住友中興の祖といわれる幸平に子息の目線から迫ってみる。

### 2. 本の刊行

大正15年初冬 広瀬幸平の長男・満正が遺文等を編集して親族に配布  
昭和8年 再版されているらしい(表紙裏の絵がない)  
平成12年 9月30日 伝記叢書として(株)大空社から刊行

### 3. 本の構成

表表紙	割木香の金地家紋	
表表紙ウラ	別子銅山図	壬申秋日窮干小喜雨亭 冬崖生 穿(?)・子・栗の㊥
裏表紙	イゲタの押印	
裏表紙ウラ	望煙楼図	石山の㊥ 南負石鉄嶽 南に石鉄の嶽を負い 北対鑽燧洋 北に鑽燧の洋を対う 千壹楽翠裏 千一の(長寿)は翠の裏に楽しみ 甌起一高堂 一つの高い堂を甌起する 中多比翁在 その中には翁のある日の老いて 日襠不老方 いかない打掛姿が多く比す 明治丙申憂拜(明治29年古稀) 廣瀬保水寿翁囑 石山隙 何吐の㊥
題名字	広瀬満正	「宰平遺績」 (?)
御染筆	有栖川宮熾仁親王	「先憂後楽」
題字	西園寺公望	「随處楽」

題字	松方方正	「 <u>優遊</u> 養老」
肖像	62歳の写真、70歳の肖像、87歳の写真	
筆跡	広瀬保水(宰平)	「逆命利君謂之忠」
自序	3ページ	宰平の偉人偉業を記録し一族郎党の子孫に贈る
本文	221ページ	宰平の一生涯
跋	榊亮三郎	宰平の国家・主君・家門への功績を讃える
附録		

**先憂後楽** 為政者は天下のことを人より先に憂い、人より後れて楽しむ。

范冲淹「岳陽樓記」

**優遊** 暇があつてのんびりしている様子。

#### 4. 広瀬宰平に関する本

半世物語	広瀬宰平
広瀬宰平小伝	広瀬歴史記念館
広瀬宰平と伊庭貞剛の軌跡	広瀬歴史記念館
住友の元勳	咲村 観
幕末「住友」参謀・広瀬宰平	佐藤雅美
黄金伝説（7章 広瀬宰平・別子新居浜編）	荒俣 宏
銅山に賭けた男たち（8章 住友の番頭）	坂本勲
広瀬宰平からまなぶもの	末岡照啓
日本補佐列伝	加来耕三

#### 5. 宰平生涯の概要

P004 広瀬宰平、元は北脇であった。夫婦養子で広瀬義右衛門を名乗り、明治維新後は「宰平」を名乗る。多くの部下を主宰するのに公平を欠かないために改名した。

P005 北脇の先祖は越前脇本の住人で、脇本次郎成重という。二人の子供があつて、分家して北脇本と言ひ、略して北脇と言う。室町時代の初めに軍功があつて、近江国野洲郡八夫村など16ヶ村の地頭職に命じられ、やがて八夫村に帰農する。曾祖父で十数代、200年余りとなる。

曾祖父は読書家で医学に通じ、遠くまで名前が知れわたっていた。蒲生郡奥之島南家から嫁をもらひ、名を美根子と言つた。5男2女をもうけた。第一子が田鶴子で伊庭家に嫁いだ。第二子が泰次郎が家督を継いだ。第三子の駒之介が父の幼名である。文政11年(1828)5月5日の誕生である。姉と兄があり自由の身であつた。

**福井県南条郡南越前町脇本。南越前町は九頭竜川の支流・日野川が貫流する北陸本線、北陸道、旧北國街道が通る交通の要所。**

P007 曾祖父の弟に治右衛門がいた。大阪の住友に仕え、別子銅山の支配人になっていた。天保7年(1836)に帰省した際に、9歳だった父は叔父に連れられて伊予に行った。11歳で別子銅山勘定場に奉公に上がった。その時の住友家の当主は住友友聞<sup>ともひろ</sup>であった。

近江では、子供は13歳までに自立できるように育てられる。このようなしきたりの中から近江商人が育ってきた。次男であった幸平は自立の道として叔父が支配人をしている別子銅山に行く。

近江商人の流れをくむ企業—大丸、高島屋、藤崎、山形屋、トヨタ自動車、伊藤忠商事・丸紅、住友財閥、双日、トーメン、兼松、ヤンマー、西武グループ、東レ、日本生命保険、ワコール、西川産業、武田薬品工業、白木屋、ニチレイ、西沢本店。

P009 住友家は大阪屈指の旧家で製銅、交易に代々従事してきた。銅採で吉岡銅山、別子銅山を運営してきた。別子は杉本勘七が吉岡から移って当たった。正月には別子銅山の銅塊と狂歌を床に飾ることが慣例となっている。

**支配人・杉本助七を勘七とする記述が他にもあるが、勘七の名前は二代目の子息である。初代は助七。**

P014 別子銅山の隣に立川銅山がある。立川銅山の鉱夫たちは別子銅山の繁栄を嫉妬して火を放った。支配人の杉本勘七は身を挺して猛火に向かったが焼死した。住友本家では上下の区別なく大阪の実相寺に吊っている。

**向かい火はなかった。従来、立川銅山は老衰期に入り貧鉱の採鉱となっていたので、開坑して間もない富鉱を採鉱していた繁栄期の別子銅山への日ごろの妬みから火を放ったといわれていたが、間違った報告に基づく記述が間違ったまま伝わっていった。**

P017 曾祖父の第二の弟に将監淡水が京都にいた。曼珠院や近衛家に招聘されて経書を講義していた先生であった。父は四書などのわからないところを叔父に質問したり、詩文の添削をしてもらった。諱の満忠、字の遠図は淡水の命名である。

**「叔父の北脇淡水翁が名付けた名前と別名に背かず住友家に忠勤し、遠大の事業を成就することを心に誓う。幸平の通称は自分でつけた。人を主宰する任にあ**

**たれば公平に決めたいと考えから。」と半世物語に書いている。**

P018 父は天保9年(1838)に大阪の今西徳右衛門の娘・相子そうこと結婚した。安政2年(1855)に主人の住友友視の推挙で、江戸支店で功績のあった広瀬家の養子となる。金子村窪田に住む。

**旧金子村で、現在の新居浜市久保田町である。久保田を通り抜ける登り道沿いに広瀬の邸宅があった。**

P018 広瀬家に養子に入って間もなく相子が亡くなる。大阪の八尾三右衛門の娘・町子と再婚する。満正の母である。

P022 万延元年(1861)3月、父は郷里を出て20年余りたって初めて帰郷する。

P024 文久2年(1862)、町子が亡くなる。満正は幼くして母と死に分かれた。養祖母の三宅為子の苦心で育った。

P024 文久3年(1863)、父は別子銅山百年の大計として利銀積立法を提案し、翌年から実行する。西条藩の銀札を別子銅山で使った縁で、3000両を無利息で借用する。やがて2000万余円となる。

P029 住友家の後継ぎが途絶えたので、慶応元年(1865)、別子銅山支配方の清水惣右衛門の意向を受けた父は、浅田家へ養子に出ていた友親の生家への復帰を得る。

P029 慶応元年(1865)9月、父は別子銅山総支配人になる。入山した時には上に60～70人がいて、年功序列だったら到底なれなかった。上下の身分差は苛酷であり、追懐すると感無量であった。平穏無事だった父の前半世はこれで終わる。これからの後半世は幕末から維新の大動乱期で、父の行動は波瀾抑揚を極める。

P028 ペリー来航に端を発した開国による外交問題と長州征伐による財政問題によるとぼっちりが別子銅山にも及ぶ。幕府からの8300石の貸下米が停止される。幕府を取り巻く一連の重大事件の中で、住友の一大事は捨て去らされる。しかし、貸下米継続の運動は幕府を動かし、慶応3年(1867)春、6500石が貸下となる。  
従来、別子銅山では貸下米を市価の半額以下の安値にしていたが、貸下米停止で売値を2倍にした。その意味合いがわからない鉱夫たちは暴挙に出た。父は鉱夫たちを救うために現場に乗り込み、瑞応寺の高橋禅師と説得して収めた。

暴動の後始末で寛大の処置を願い出たが、松山藩では主犯10名を捕えた。後の鉦山の改革では、鉦夫らは恩義に感じ従順に従った。

P035 立川中宿の宿舎で病気に伏した時、毒入りの菓子箱が贈られたことがあった。愛犬が毒見で死んだだけだったので不問にした。

P041 慶応4年(1868)、慶喜追討令が下り、高松城、松山城が土佐藩によって押さえられる。土佐藩士の川田小一郎によって、別子銅山、新居浜分店も押えられる。別子銅山は幕府の事業でなく住友の事業であることを夜を徹して説明する。川田はその熱誠に打たれ、差し押さえ解除に尽力してくれる。住友万代の基礎はここに置かれた。岩倉具視、川田小一郎が父の人となりを知るところとなった。

P046 父の保水という号は、野洲川に雅字をあてた。別号の竹屏も八夫村による。

**八夫村の高木神社前を「<sup>ちくじょうぐち</sup>竹生口」という。土地の古老は竹が繁茂している所を意味すると言う。幸平は故郷の竹がおおう様をあらわす「竹屏」が別号。**

P048 新政府の財政問題で、二分金、一分銀の増鑄を計画したとき、父の機敏な対応で献納することにしたので、住友家は功勞により苗字帯刀を許され、銀500両を賜った。

P048 幕府の瓦解で長崎御用銅はなくなり、住友家は銅を自販しなければならなくなった。別子銅山の収支は赤字で、本店も住友家の家宝什器を担保として借金で賄っている状態である。大阪の豪商は10のうち7～8は潰れていった。

P052 別子銅山の支払いに大阪本店が応じられなくて、百考を重ねた父は、自分が引受人となる預手形を発行した。しかし、紙幣に類似していて国法に触れるので、木札にして(山銀札)通用させた。

P054 別子銅山は歩役札(山銀札)で何とか持ちこたえたが、大阪本店は益々窮迫した。旧銅座役人から10万円で別子銅山を売却しないかとの話が出た。重役たちは売った金を負債返却、本家維持する考えであるのを父は京都で聞いた。急遽大阪に下り、暴挙を説き伏せた。住友の存亡を決する2つの重大事件は、父の尽力で事なきを得た。

P055 別子銅山の収支は黒字にならない。人員増をすれば出鉦も増すことは分かって

いるができない。各自の能率を増加するしかない。賞罰の制度を設けて、能力別の等級を定め、厳明平等の取り扱いの下で出鉱増になる。次に、製錬事業の改革に着手し、立川での山元精錬することにした。職人の半数を新工場に送り、残り  
は依願退職で長堀吹所を縮小して閉じた。

**山元精錬 抜銅防止策として幕府監視下の大阪で精錬させた。明治政府となり  
生産・販売が自由となり、コスト比較から立川での精錬となり、や  
がて新居浜での製錬となっていく。**

P058 改元した明治元年(1868)9月、父は鉱山司に出仕する。明治新政府は、旧銅座役所の範囲を広げて大阪銅会所とした。所管を拡張して鉱山司を置く。父は現役の鉱山熟知者として招聘された。生野、中瀬に派遣される。伊豆に派遣された際に江戸での業務の閉鎖、北脇家の相続を処理する。別子への帰路は、二度の鉱山司出仕の監札の提示で警備を通過する。

P062 鉱山司出仕を辞して、別子銅山の第二次改革を行う。  
鉱山は別世界である。飲食、喧嘩、借錢、逃亡は日常茶飯事で年中行事である。生活の第一義の飲食の改革として醸造場を建設する。  
無料貸与の住宅を安価で売り、依存心を払しょくする。生活改善精神の向上に心した。小学校、病院、警察、貯金預所、郵便電信等の施設を建設した。  
時間の観念がないので、仕事の終始を太鼓で知らせた。雇人と鉱夫を区別せず適材適所に配置した。雇人の店内食事を自弁とした。  
採鉱の改革としてコワニーが実行していた火薬を採用した。穴を練る棒を盛山棒と命名した。

### 明治31年写真帖の「重任局と勘定場」の写真

**屋上にある檜太鼓が写っている。明治25年の火災で目出度町から対岸の木方に移転した時の写真である。以前とそっくりの建物を建てて太鼓檜も同じである。広瀬邸の望遠楼の階下に太鼓を2個吊している。**

P072 改革で出銅高の増加が見込まれたので、次に販売の改革に乗り出した。明治2年(1869)頃に神戸に支店を設けて、白水栄造の商号で外国人と自由取引を始めた。

P073 幕府から借りていた廉請米の代金の猶予に奔走するがかなわず、暮れに江戸から大阪に帰るが、乗船した船は時化で漂流する。数回死に直面するが、これが最初であった。疲れた体で本店に出向く。重役一同の大広間で「相変りて御芽出と

う」と新年のあいさつをする。幸平は旧を捨て新を取り、禍を転じて福と為す考えからそのように言った。

席を改めて酒宴になったが、維新変革期に住友家百年の大計の対策を講ぜず、旧態依然としているのに憂慮する。涙が雨のごとくあふれ出る。祝宴に涙は不吉と咎められる。反論して喧嘩になりかけたが人が入って事なきを得た。

P079 廉請米の代金の猶予運動がうまくいかなかったので、本家を板囲いするように当主に進言。この時ばかりは熱弁家の父も十分の一も言えなかった。声なき中、承諾を得た。再度上京して5ヶ年賦返納にしてもらい、鉱山経営の基礎を固める。

P082 明治4年(1871)、父は再びコワニーを招聘した鉱山寮生野銀山に出仕する。昔に南蛮人から絞り吹きを習ったように、外国技師から学び別子銅山に応用するのが目的であった。そしてコワニーに別子視察の快諾を得る。

視察してもらい、製錬で出るガスから硫酸を製造すること、貧鉱を沈澱法と溶解法で選鉱することの2点を助言された。

P085 コワニーの視察後、横浜のツクリアントール商会に外国技師の斡旋を依頼して、フランス人のラロックを雇ことになる。月給は800円。住友にフランス語のできる人がいなくて契約書作成に当惑する。契約書の不備を工部省から指摘される。契約書の訂正は困難をきたしたが、献身的心持で以て迅速に妥結する。明治7年3月にラロックを雇用する。

**ツクリアントール商会 フランス人の仲介者のガイセン・ハイメルはヘヒト・リリエントールの代表であり、オリエンタルバンク横浜支店の代理人も兼ねていた。**

**ルイ・ラロックの月給は広瀬幸平の6倍の600円。**

**フランス語の契約書は日本語の契約書と内容が異なって、フランス語がわからないことをいいことにして住友側が不利益になっていた。**

P091 ラロックは和船の脆弱さを理由に乗船を拒み、小型汽船を買い白水丸と命名した。専門の乗組員がいなくてはなはだ危険であった。後日播磨灘で和船と衝突事件を起こす。弁護士もいなかったので父が法廷に立て勝訴する。

**住友が愛媛県へ外国人技師の雇用願いを工部・外務両省へ提出したいので添え**

状を依頼したのに対して許可が下りたのは明治6年(1873)9月。ヘイト・リリエントール社はルイ・ラロックと既に6月に仮契約書を結んでいた。住友が木造蒸気汽船を購入して白水丸と命名したのは明治5年(1872)11月なので、フランス人技師の別子赴任説は間違いである。広瀬宰平が東京出張の度に大阪から外国汽船や岩崎弥太郎経営の九十九商会の汽船を利用していたので、利便性から購入したと考えられる。

P094 明治維新後、父は別子と大阪の事業を任された。話題を大阪に転じる。新政府は明治2年(1869)、外国貿易を奨励として開港場に為替会社と開商社を設け、住友もその中の頭取を命じられた。父は新商人の道を示すと理解した。

P097 明治6年(1873)、内外公私を区分するために長堀の居宅と店舗のうち、本店を川口富島に移転した。大阪は西部に発展していくと、将来を見越しての決定でもあった。移転先の本店を3～4尺地上げしたところ非難を受けたが、明治18年(1885)の長雨の時に被害を受けることはなかった。長堀川の端が無事だったのは住友家が浜側の建物を撤去していたので水勢を緩和させたためである。父の用意周到による。

P101 山本新田には別荘があり、小作人は長年にわたる住友家の恩恵に慣れて耕作に力を入れず、住友家の収入になるどころか支出となっている。父は改革として、別荘を引き払い、小作人の依頼心を払拭し、小作料を引き上げた。裁判になったが3年で屈服させた。

大阪市内の貸家も低廉で修理代にも足らない状況であったので、家賃を引き上げた。反対の声が上がったが、別子銅山での経験から代表者に懇切丁寧の説明して納得させた。それでも料値上げは世間よりも低かった。

P104 神仏分離で火葬も悪習とされたが、父は土地の経済面や衛星面から火葬推進を説き、八弘社をつくった。明治維新の商人は旧套墨守でなく、進取的でないといけないとの考えからであった。利益獲得の風評が上がったが、公先私後のスタンスで弁明しなくても分かることであった。

P108 明治になって米価は激しく変動していた。下落時に米穀の輸出をしたところ、輸出先に着荷したときに、腐敗欠損があるとの理由で損害賠償を裁判所で争うこととなった。父は法律に詳しいわけではなかったが、外人に一歩も譲らず、一審での敗訴を二審で勝訴とした。父の勇往邁進には用意周到があったからである。

P110 父は維新前後より住友家のために東奔西走し、別子にすることはなかった。ラ



ロックを招聘して別子に居住して洋式採鉱を学ぶ。家族も久保田から小足谷に一軒を構えて呼んだ。

ラロックを招聘するのに誹謗があったが、天の激励と逆手に取った。文明の教育を受け遠路異邦に来るラロックに仕事をしてもらうのに3ヶ条を定めた。時間の厳守、約束の履行、待遇の懇切。処遇に満足し、通訳の塩野門之助の援助を得て報告書を作成した。雇用期間は3年であったが、雇用許可と往復に1年を費やした。別子山には明治7年3月～8年11月の1年9ヶ月いた。ラロックは継続雇用を希望したが、斡旋のガイセルは契約時に不正を働いたので、解雇した。一気に近代化すると多額の資金が必要となり、官営生野銀山のように失敗する恐れがあったので、塩野と増田芳造をフランスに留学させることとした。増田は病気で直ぐに帰国したが塩野はサンテチェンヌ鉱山学校を卒業して6年後に帰国した。

**ルイ・ラロックの雇用は、明治7年1月1日から明治8年10月31日までの1年10ヶ月。別子山に登ったのは明治7年3月。**

**別子鉱山目論見書の総事業予算は、純利益の7年分に相当する。その内フランス人技師の件費として20%をもぐらせていたのを見破る。純利益の約1年5ヶ月分である。不誠実さとアヘン戦争から乗っ取られるのを危惧した。**

P116 別子銅山は嶺南にあるので、新居浜へ輸送上、採鉱上の利益を考えると隧道を抜かなければならないのは父の積年の経験からの確信である。ラロックは技術的観点から中止を勧告した。しかし激論の末、口を封じて決行する。理論足らずか、経験足らずのどっちかであるが、明治新政府の近代化は経験不足から失敗を招いていた。別子銅山は失敗をしなかった。

**第一通洞の開削は、「別子銅山目論見書」を部分翻訳したために、中七番に向かってトンネルを掘るのを距離が約1000mと同じであったために間違っ北に掘った。「別子銅山目論見書」が100年ぶりに完訳されて勘違いしたことが判明。**

P118 別子銅山には本坑が2つある。本舗と前山舗である。前山舗に大鉱脈があるのは叔父の北脇百禄から聞いていた。父は経験から左の本舗に大鉱脈があるのを熟知していた。ラロックも本舗に立坑を計画していたので確信する。ラロック解雇後、岡田梅蔵に仏文の設計書を読めさせて、工事の素養のない父が難工事を成し遂げた。東延斜坑の開削・整備は、別子銅山の盛運への初日になるといえる。

**本舗と前山舗の記述は半世物語と同じ。本舗は歎東問符、前山舗は歎喜問符。**

P120 別子銅山が幕府の安請米制度で鉦夫に安価で米を販売していた。安価米が銅山繁栄の策であるとラロックは称賛されたので、明治になったので父は安価米を廃止しようと考えたが継続した。根本手段として田を購入していき、後任に託した。

P122 新居浜は別子銅山の外港にあたる。新居浜分店に陸揚げされ、船出しされる。別子銅山と新居浜分店をつなぐのが立川中宿である。新居浜への2里余りは平坦だが、別子への2里半余りは羊腸の山道である。山道は立川村の男女により運ばれた。父は交通の便が別子銅山の繁栄と考えて牛車道を計画した。またもや非難がなされ、立川村では失業すると誹謗されたが意に介せず明治13年に完成させた。新居浜立川間は県道となった。

父に恨みを持った人が馬の背越の険で駕籠に乗った父を谷に転落させようと謀ったが、難路の労を忍びず、駕籠を降りていたので難を逃れた。

P128 別子新居浜間の新道は、勾配を緩くして距離も伸ばしたので人力車、牛車で自由に往来できるようになった。伊予では牛馬を運搬に使わないので、当初は飾磨生野間の牛車を使った。新道ができて二人引きの人力舎で通った。6人を要した窮屈だった駕籠に比べると快樂である。展望もよく気分もいい。錦峰繡溪に接すると一幅の絵の中にいるようである。得意の七言絶句に詠う

牛車道開設で土地購入に苦勞したことを忍ぶ。第一通洞開設時も同様であった。角野村立川村の共有山で入会権も絡み訴訟となった。瑞応寺住職に仲裁を頼んで五筆を買い取り、訴訟費用も住友家で負担した。父の卓見があつて住友家の工業も盛大となったという美談である。

**半世物語で大津のコッテ牛を買い入れたとある。江戸時代には牛車の使用は防備のため限定されていた。大阪、京都、名古屋、駿府、江戸、仙台の6都市だけであった。京都～大津の疎水開削で牛車運送が水運に変わったので、郷里の近江牛を使う京都～大津の牛車が失業したので、それを導入したようである。雇った牛方が「日の岡越えの牛子歌」を歌っている。**

(日の岡越え：京都の蹴上から山科に越える峠)

P134 ラロックの招聘を機に白水丸を買って汽船持ちになった。次に廻天丸を買って貨物船として大阪・新居浜・下関航路を開く。新居浜は遠浅の海岸だったので御代島を買って小さな港を整備した。鉦山の改良、交通機関の発達で別子銅山は隆盛する。自然に人工を加えた結果である。

**住友は白水丸に次いで明治7年2月に富丸を購入し、大阪・新居浜間航路を就**

航した。しかし、小蒸気船で長途の航海が困難なために5～6回の航海で廃止された。その次に明治7年12月に購入したのが廻天丸である。

P136 白水丸と廻天丸の船長は鉾山出身で働き者であったが、父の忠告を聞かずに出帆して難破沈没、機関爆発で沈没してしまった。父の憂慮となるところである。職に殉じた者に対しては功績を重んじ、丁重に弔い、遺族には支援を行い、後人が仕事に邁進できるようにした。瑞応寺境内に住友家歴代及び別子銅山従業員の霊牌堂を建立し、実相寺住友家墓地の一隅に支配人の杉本勘七の墓石を移した。

P140 西南の役が起こると、政府からの火薬の払い下げが禁止されるのを見越して、火薬の節約をしたので、火薬が欠乏することはなかった。休業の鉾山も出たが、別子では出銅高に影響はなかった。

P141 住友家の耕地は、山本新田と天王寺村の70町余りであった。父はこれを倍増して別子銅山の食糧にする考えを持っていた。また大阪市は西に発展すると確信して、島屋・恩貴島の新田を買った。島屋新田は堤防を改築したので後の災害でも安全であった。

P143 西南の役は革新主義と保守主義の最後の激突であった。住友家でも施設の改良、新人の登用、家憲の制定、外国商館との取引方法の改善などをした。

しかし、新人の登用は大阪の旧家・住友ゆえに躊躇した。親友の三井家を例とした助言で悟り、伊庭貞剛、久保盛明、加川勝美、広瀬亘を招聘して重役につかせた。父はいろいろな方法で訓戒指導した。その例として木版刷りの八徳(孝・悌・忠・信・勇・義・廉・耻)を配布した。

**八徳：天上人が人に給った八の宝。宰平は、「礼」代わりに三徳(智・仁・勇)の「勇」を入れている。**

**孝 親を尊ぶ心**

**悌 兄弟仲良くする心**

**忠 己を尽くす心**

**信 信じる心**

**勇 恐れない心 (礼 恭しく敬う心)**

**義 正義を貫く心**

**廉 清廉で廉潔な心**

**耻 悪を恥じる心**

- P152 住友家には成文の家憲がなく、旧規慣例を古老が口伝で知るだけであった。父は明治15年(1882)に在来の諸規定を集約して家憲を制定。世間では住友家法は古来から厳粛だったから事業が隆盛発展したというが、本当は父の働きによる。
- P156 明治11年(1878)に神戸市栄町に当時一二を争う洋館を建てた。その後、外国商館との取引では相手の番頭に口銭を与えたり、延取引で保証金を納める習慣になっていたが、口銭を止め、延取引では相手から保証金を取った。
- P157 西南の役後、我が国では商工業が著しく発達した。商都・大阪も工業化が進んだ。明治11年(1878)に五代友厚、中野梧一らと計って大阪商法会議所を設立し、副会頭に就任した。また大阪株式取引所創立委員として尽力して、同年に開業すると、所長に就任した。明治13(1880)年の停止時は所長を辞していた。
- P161 明治12年(1879)、多年に及び住友家に忠勤したこと、とり分け維新前後の苦勞が世間で認められ、大阪府から金5円を添えて表彰される。
- P162 貿易が盛んになり直接輸出する日朝航路を開設するが成績が上がらなかった。現地調査で中国人商人の既得権が障害と判明。朝鮮の支店を閉じた。
- P164 明治14年(1881)、夫人を伴い東北・北海道歴遊に行った。まず郷里の八夫村に寄って景瑞翁の法事を済ませた。その後、伊勢に参拝し上京した。東京では三条実美にお会いした。東北の製糸場・鉾山などを巡視した。続いて北海道を巡視した。北海道の生産力に注目したが、人材と年数を要すると考えた。
- P170 大阪製銅会社、大阪硫酸会社、大阪商船会社の創立は父の力による。  
大阪商船会社は、今では大会社になったが父の社長時代の苦心は示唆があるので語る。大阪の航運業は小船主乱立で過当競争をしていたので、父が中心となって船主を糾合して大阪商船会社を設立した。会社に参加しなかった船主は競争心を持っていたり、会社内も寄合世帯でまとまりがなかった。船の改修が必要であったが会社自体が脆弱であった。しかし、父は国の補助を得て会社の基礎を築いた。その機会に社長を辞した。西南の役では30余の船が徴用されたので父の苦勞は報われた。その後住友の事業に直接関係ない会社の重役の話が多くあったが応じなかった。
- P176 商工業者として個人利益、国家利益の両面から輸出を増やすことに努める。製糸、再製茶、樟腦の3輸出業を経営する。製糸は滋賀県で、樟腦は神戸市外で、製茶は神戸外国商館の手で行われていた中に割って入っていった。しかし、製糸

は長野県・群馬県へ、樟脳は台湾で、再製茶は横浜市・静岡県にシフトしていったので住友では止めた。父の精神は住友の事業全般に浸透している。

P179 教育をはじめ、慈善寄付をして表彰することが多かったのでいちいち示さない。

P180 還暦になり東北旅行時に計画していた欧米漫遊に行く。アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、ドイツ、スイス、イタリアを回った。外国語の必要を痛感したので、子弟、子孫には詳しく知っておくように説いた。

巡回中、鉱山業については周到な観察をした。欧米では専用鉄道を利用していたので、別子でも時間と経費の節約から鉄道を敷設する。

ドイツ技師と話す、岩佐巖・技師の別子の含銅硫化鉄鉱を製鉄の原料にする考えと同じであった。帰国後、山根製錬所に硫酸・鉄を取る試験場を設けた。父は煙害問題の根源と機械工業の需要に着目していたからである。さらには増収と国家経済に寄与する考えからでもあった。しかし、大規模に実施しないと営利事業にならないので、試験段階で中止した。だが現在の製鉄、肥料製造とはつながりがある。

P189 明治23年(1890)は別子銅山開坑200年に当たる。記念式典の費用を前もって積み立てていたもので、住友家では当年の収支になんら影響しなかった。父の用意周到を知るべし。

大阪の祝典でアメリカ領事の人が、世界で別子銅山のように200年続いている鉱山を見たことがない。記念祝典に列席するのは無上の光栄であると述べる。勤続50年に及ぶ父は、その祝辞を聞いて万感迫り謝辞の口が開かなかった。開坑150年祭に列し、200年祭を挙行することができたが、住友家がますます栄え、250年祭、300年祭、500年祭が執り行われるような千年不滅の名家になってほしいと願った。また忠実の人材を用いて継続してほしいとも願った。

開坑200年を記念して、別子の銅で楠正成像をつくり、宮城のいい場所に建設を出願していたら許可が下りた。制作を東京美術学校に依頼した。その後、住友に続く記念品献納は聞き届けられなかった。

**明治初期は、欧米に新生日本を認めてもらうために欧化主義をとったので、日本古来の心を捨てていった時期であった。それを憂い国風文化再興のためにつくった東京美術学校へ制作依頼して文化のパトロンとなって支援した。**

P195 父は、鉱山事業は永久的事業なので基礎固めをして末永く利益を得る信念だった。別子の植林事業も土地買収もその考えからであった。新居浜分店も立川分店

も敷地は借地であった。鉱山の食糧自給をめざして田畑を買収し、煙害被害地の土地も買収する考えであった。道路、港湾、鉄道、工場をつくるにも土地所有が必要である。田畑は別子銅山を賄う米の1／3を確保した。

旧幕府時代は、周囲の官林は少額の税金で自由に伐採していたが、新政府になってからは借地料を払って広い山林を利用した。樹を植えて百年の大計をなすために年間5万本を植林した。製錬所を四阪島に移転して樹木の発育もよくなった。

P199 大阪神戸と別子山との往来は新居浜経由で行った。山陽鉄道の進捗で尾道まで伸びると、新居浜とは汽船連絡とし、支店を開設した。銀行類似の仕事をした。

P200 明治5年(1872)に国立銀行条例発布されると、知人から銀行業経営を誘われたが応じなかった。住友家で銀行開業は父の退職後となった。当時は鉱山業を本業としたので鉱山業以外に拡張する余裕がなかった。理解はしていたが時機尚早と考えたからであったので誤解を解いておく。

P202 明治25年(1892)に民間人として初めて勲四等・瑞宝章を、渋沢栄一、古河市兵衛、伊達邦成といっしょに頂いた。

住友家に忠勤し別子銅山を我が国屈指の鉱山にしたことと、大阪での実業界発展の寄与したことによる。

叙勲を機会に新陳代謝として住友家総理の大任を後進に譲った。そして住友家の終身分家になった。

退職後、紀州湯崎温泉で半世物語を書いた。

P208 明治31年(1898)に古稀の祝いとして東京美術学校で銅像をつくって中萩の広瀬邸に建てた。

P211 父は明治30年(1897)以降、須磨の別邸で悠々自適の生活を楽しまれた。

P213 明治29年(1896)に天童寺に晋山した峨山禅師は父の方外の友であったので、薩長の攻防で廃墟になった天童寺を再建するのに奔走した。

**硯石が建立されていて、その背面に宰平が天龍寺再建の発端が書かれている。  
(添付の隷書体碑文及び和訳参照)**

P217 父は初め今西相子と結婚したが初産の時に母子ともに亡くなった。次に八尾町子と再婚したが、満正を生んで亡くなった。

大正3年(1914)に流行性感冒に罹り亡くなった。為すべきことは全て為した

ので、言葉を残すこともなかった。住友吉左衛門友純が葬儀委員長となって、大阪四天王寺で葬儀を執り行った。

## 9. おわりに

子息の満正の目からしても、父・宰平は住友家を背負って活躍した立役者として映っていた。「先考が・・・した。」と、父の功績を記述していて、半世物語と論調は同じである。子供の目からしても偉大な人物であった。進取の気質で明治維新という新しい時代のうねりを生き抜いた姿が言葉となって綴られていた。

旧字体で項目見出しもないので読みづらい文と思っていたが、半世物語を底本にしているようで、自ずとオーバーラップして歴史劇の中に再び引き込まれていった。

## 老龍研碑和訳

峩山和尚、天龍寺を再建し、選仏場を移し法堂を為す。規制は旧に拠り、宏大美麗なること新の如し。

その天井に一世の名手の画を得んと欲し、鈴木松年翁のいほりに親しく詣<sup>いたり</sup>為すを請う。翁怡然と之を諾す。

翁の性、豪宕にして、巨硯を新作せしむ。堅十尺、横四尺、重さ八千斤。三頭の牛に之を引かせて運んだ。

一山の雲水齋に持して墨を磨<sup>す</sup>る。和尚も亦誦経し、翁の功を助く。即経営惨担、低徊累日、一旦機至り、神旺乃衣を振り起立し、大筆を提ぐる。こと箒を浸すが如く、大きな硯に注ぐ。

墨瀋淋漓、直に奮腕疾掃、勢は風雨の如く、にわかには須叟にいたる。雲煙滂渤、鱗甲隠見、龍已に堂に腕腕たり。用功に中<sup>あずか</sup>りて、一月にして成る。筆力雄健、墨色陵離、其の勢は矯矯として飛動せんとす。

実に明治三十三年二月也。今ここに癸卯、翁と知友相謀れて巨研を山内松楸鬱鬱の処に建つ。硯の背面には、画龍の由来を録して後世に伝う。衲に拜謁<sup>はいごつ</sup>して文請う。衲もとより和尚と道交はなはだ密にして、又翁と親善す。即ち辞さず、そして之を記す。ただ惜しむらくは和尚の幾何<sup>いくばく</sup>も無くして示寂し、斯の研の建碑を見るに及ばざりしことなり。

明治癸卯二月上澣

東福寺管長齋門敬冲撰

従六位勲四等 広瀬宰平書

【注】 重さ八千斤=4,800kg

明治癸卯=明治36年(1903) 宰平翁76歳

## 宰平遺績 <資料>

### 2. 本の刊行

大正 15 年初冬 広瀬宰平の長男・満正が遺文等を編集して親族に配布  
 昭和 8 年 再版されているらしい(表紙裏の絵がない)  
 平成 12 年 9 月 30 日 伝記叢書として(株)大空社から刊行

### 4. 広瀬宰平に関する本

日本補佐列伝 加来耕三

### 3. 本の構成

表表紙	割木香の金地家紋		
表表紙ウラ	別子銅山図	壬申秋日窮干小喜雨亭	冬崖生
		穿(?)・子・栗の㊥	
裏表紙	イゲタの押印		
裏表紙ウラ	望煙楼図	石山の㊥	
		南負石鉄嶽	南に石鉄の嶽を負い
		北対鑽燧洋	北に鑽燧の洋を対 <sup>こた</sup> う
		千壹楽翠裏	千一の(長寿)は翠の裏に楽しみ
		甌起一高堂	一つの高い堂を甌起する
		中多比翁在	その中には翁のある日の老いて
		日襠不老方	いかない打掛姿が多く比す
			明治丙申憂拜(明治 29 年古稀)
			廣瀬保水寿翁囑
		石山隙	何吐の㊥
			(?)



## 半世物語

名は満忠、字は遠図、宰平は通称。名と字は叔父の北脇淡水翁が名付けた。名に背かず住友家に**忠**勤し、**遠**大の事業を成就することを心に誓った。

宰平の通称は、明治維新で衛門の名称がなくなったので自分でつけた。人を主宰する任にあたれば公平に決めたいと考えからである。

36歳以降の業績の半分くらいしか自分でも認められるものでないが、住友家の家人の参考にしてもらい、その子孫の戒めにでもなればとのささやかな思いから書いたものである。その意をくんで読んでいただきたい。

### 《 上 卷 — 慶応元年～明治10年 》

#### P010 本家吹所の銅蔵封鎖

住友本家吹所には、旧幕府の丁銅幾許万斤を預かっていたので薩摩藩に倉庫を封鎖された。恐怖心から傍観するのみで、封鎖を解く任に当たる者がいなかった。堪えかねた宰平が奔走して封鎖を解いた。

#### P013 給米停止と対策

幕府が倒れて長崎御用銅がなくなり、鉾山用の安米もなくなり鉾山財政も困難になる。本家の財政もひっ迫する。宰平は私製の預かり手形のようなものを発行する。法に触れる恐れがあったので宰平の私財を抵当にして木製の札を発行する。

#### P017 別子銅山売却説

住友本家の財政はますます困難になり、別子銅山を10万円で売却することを他の店員で決めた。宰平は血涙をそそぎ争議してこの無謀を止めるが、聞き入れられなかったら、明治維新後、破産没落した多くの旧豪商の中に住友家も入っていたかもしれない。

#### P025 本家吹所の別子移転

従来の荒銅を輸送して大阪で精錬するのと、新たに別子山麓の立川で精錬するのを経済比較した結果、山元精錬するようにしたので移転する。

#### P028 鉾山司出仕

明治元年9月に鉾山司に任命されて、外国人技師コワニーとともに生野鉾山に出仕する。中瀬鉾山、伊豆金山を巡視する。併せて東京の2つの出店の閉店の指揮を任されていたので、多忙の中で公私の用務をこなす。

#### P036 火薬と盛山棒

石材を切り出すのに火薬を使用するのを他で聞き、調査検討させて別子で火薬を使って鉾石を切り出すこととした。

鉦塊に穴をあける鍛鋼の棒に定称がなかったので、盛山棒と命名した。

P040 年頭の苦諫

明治3年1月5日、安閑と旧来どおりの祝賀の宴を開く。宰平は「相変りて御芽出度候」とあいさつする。満座の人たちは不吉と失言をとがめる。宰平は、旧を捨てて新しきを取り、禍を転じて福とするように変わらなければ、住友家は安泰でなくなると説得する。

席を改めて、床に別子銅山開基の友信の軸を掛け、開鉦当初の銅塊を飾りて、当主・重役たちに対して熱涙をもって諫める。それがあったから今の盛運がある。

P046 別子山上の醸造業

人間生活の第一位の飲食品は、山中では米を除いてはなはだ粗悪である。酒、味噌、醤油は6里離れた西条から来るが、酒は1/3は水、醤油は塩水に着色、味噌は下劣な味である。衛生上、雇員、労働者に有害なので小足谷に醸造所を新設する。

最初は水質が合わず、高地だったので寒冷で失敗する。係員の努力で山民の満足するものができるようになり、別子山の需要を満たすだけでなく、土佐の山村にも供給する。

P048 別子山の近代化

山民は字が読めなく物事を理解できるものがない。教育の必要性を感じ学校を設立する。そして尋常小学校、高等小学校は県下一になり称賛される。

続いて、病院、警察、貯金預所、郵便、電信、電話等が整う。

P053 コワニーの別子視察

コワニーが来山し、実況視察して「鉦煙から硫酸を作り、沈殿法と溶解法で精錬すれば莫大な利益を得る。」と提言を受ける。この時に外国人技師を招へいしたいと考えた。

P054 ラロックの雇用交渉

リリエントール社とルイ・ラロックの雇用契約を締結する。その締結について国の許可を取る手続きをすると、フランス語が理解できないことをいいことに、契約の中に理不尽で、憂慮すべき箇所が多々出てきて修正する。

明治7年3月にルイ・ラロックが別子山に来る。

P054 御代島築港

新居浜の海浜は遠浅いで新規購入の汽船・白水丸の繫泊に適さないので、無人島の御代島に波止場を築く。宰平はこの時に、自然に人の手を加えてより便利にする必要を自覚する。

P067 ラロックへの配慮

宰平は到底外国人を使える器量でないと誹謗された。それに逆らうのではなく忠告と受け止め、3箇条を心に決めて当たった。

1. 時間を違えない
2. 約束を守る
3. 保護手当を十分にする

通訳には塩野門之助を雇って当てた。通訳の功績も大きかった。

P071 白水丸就航・衝突事件

店員の中に航海術が分かる者がいなかったのも、当初の間、宰平が船長で航行した。

播磨沖で和船と衝突して裁判になった時、弁護士などいないころなので宰平自ら神戸裁判所に出頭して争った。勝訴して損害賠償の責を免れた。

P071 米穀輸出

米穀を輸出した時に、輸出先で荷揚げすると腐敗欠損等があつて外国商社から損害賠償で起訴された。神戸の初審では敗れたが、大阪に控訴して勝った。この時も弁護士に頼まず、宰平が法廷に立った。

P088 第一通洞

宰平は、長年の経験から将来の事業進展の必要性を確信して、反対するルイ・ラロックと激論を交わした末に第一通洞の開鑿に着手する。

P094 立坑道

宰平は、ルイ・ラロックを解雇した後、鉱夫の中に熟練者がいない中、自ら率先して日本式の測量法で「目論見書」にある立坑道の開鑿に当たる。

P095 別子新道計画

宰平は、険しい山ではあるが、運搬道路を開設しないと鉱山の大事業大目的は完成しないと考へて、明治 8 年に牛車道建設に着工する。難工事の上に詳しい技師もいなく、日本式技術で困難を冒してついに明治 13 年に完成する。その全長さは海岸から別子山嶺までの 7 里あまりである。

新道開設で失業すると考へた村民が、馬の背の険しい道で宰平を突き落とす陰謀を企てたが、険路は輿丁(山駕籠かき)の肩を休めるので歩いたので偶然にも難を逃れた。

P102 回天丸・白水丸の沈没

回天丸は悪天候だから出航を見合すように宰平が言ったのに船長が聞き入れず沈没した。白水丸は修理するように忠告したのに聞き入れず出航して沈没した。二つの難破で職員や乗客を亡くした。

鉱山でも間歩の開鑿、運搬路の開設で多くの従事者を亡くした。もとはと言へば宰平の進取的観念と大成的豪気による国家、主家のための計らいであった。宰平に対する功勳の称賛は値しない。冥福を祈るばかりである。

《 下 卷 — 明治 11 ~ 明治 27 年 》

P102 外国商館との取引上の改革

商館の番頭に口銭を渡す悪習があり、その排除は困難と躊躇する人々があったが、幸平は廃止した。

延売契約では外国商人よりまず証拠金を取って置いてから物品を渡し、代金を受け取る権利を占得した。

P102 人事刷新・伊庭貞剛

年功序列の旧習を守っていたのでは時世の進歩についていけないと看破したので、鴻池家、三井家を参考にして人材を得ることとした。伊庭貞剛、久保盛明、加川勝美、広瀬担を雇い入れて重役とした。適任者を選抜して登用した。

P118 堂島米相場・五代友厚

米穀を買い占めて米価が高騰した。五代友厚の細民の困難を救うとの熱意に加わり、相場を崩して高騰を抑えた。この経験から投機的業務は真正な実業家のすべき事でないを確認する。幸平一生の過誤失格と自ら戒める。

P124 別子山新道と牛車

伊予地方には牛種乏しいので大津のコッテ牛を買い入れ、新居浜支店で牛を飼育した。牛夫も雇った。単に運搬のための目的だけでなく、農家公衆の利益も考えてのことであった。以後数年で伊予地方の村では耕耘、運搬に牛を使うようになった。

牛車道ができると二人曳きの腕車で往来させた。昔 6 人で肩に担いで苦勞して運搬していた時に比べると便利で早くなった。

おりしも晩秋だったので錦峰繡溪の風景書画よりも麗しく、遠近山水の眺望詩文を作って述べこともできないくらいである。

(錦繡峰と西赤石山から石ヶ山丈への尾根の紅葉を角野町時代に景勝地と命名したのは、半生物語の「錦峰繡溪」からの引用か。)

P130 住友家法の制定

住友家は一大旧家なのに口頭伝襲の慣例で物事を行っていた。永遠の隆運を図り商工業務の健全な発達のために家法を制定する。幸平が主宰者となって以来逐次規則を制定してきたものを集めて大成した。明治 16 年 1 月から施行する。(家法の施行は明治 15 年 3 月からである。家長は君臨すれども統治せずの立場が明らかにされる。)

P131 小足谷水抜工事

3分の1を切り抜いた寛政年間に、幕府から下流の阿波に鉋毒の被害が及ぶから工事の中止が命じられていたと伝えられていた。幸平が開坑課長の時に、将来必ず湧水のために廃業に至る不幸を免かなければならないと信じ、幼稚な日本式の測量法で工事設計を作成し、開鑿を再開した。

夜業中に食事をとるのに、飲み物を温めるために炭木を燃やすと煙が坑内に充満して窒息死しそうになった。坑夫見習の者に大声を揚げて疾走させるとい

っさの機転で、空気が動き危機一髪で助かった。明治17年の冬に竣工した。  
(貫通は明治17年、完成は明治19年である。)

P134 坑底の湛水

鉦山の坑道を旧慣により「鋪」という。わが別子山に二鋪あり。本鋪と前山鋪と呼ぶ。(歛東坑と歛喜坑にあたる)

P137 新居浜分店の惣開移転

将来の発展を考えると手狭なので移転を計画するが、店員や重役たちは、旧態依然とした考えや移転費用の巨額におのき躊躇して同意しなかったが、取りまとめて移転した。清水惣右衛門がすでに開拓した土地であり、惣開の名を得た所なので顕彰の記念碑を建てた。

(惣開の地名は清水惣右衛門が開拓する90年ほど前からあった。)

P139 別子の植林

23歳のころに会計を担当していた時に材木山の事務を兼務したことがあった。「百年の謀は徳を積むにあり、十年の謀は樹を植えるにあり」の先人の言葉を体現して杉苗を栽培させた。すでに成長して杉林になる。

鉦業の拡張に杉檜等の木材が必要であるので山林課を新設した。植林は鉦山業に必要なだけでなく、水利(治山治水)上からも大いに関係する。維新後の山林乱伐を嘆いてのことでもある。別子山の富源に鉦山以外にもあり、後年が楽しみである。

(本格的植林は明治になってである。苗種は明治以後檜が中心になっている。)

P143 新居浜付近の土地購入

新居浜分店も所有地でなく借地にすぎない。土地を所有していたら鉦業の永遠の発展を謀るにも憂慮することもない。別子鉦山の経営の許す限り、田畑、宅地を買い入れる。別子鉦山で消費する1年分の米穀の1/3を自前で賄う。道路開設、鉄道敷設においても妨害を受けることもなかった。煙害の苦情も多くは自分の土地なので穏便に済ませた。

P154 銀行業

国立銀行条例が發布されて、住友にも銀行を開設するように勧めが各方面からあった。銀行業は商業者の本業と言えない。住友は銀行業のような易しい事業は他に任せ、困難な事業に果敢に取り組み国家に貢献する。併せて主家の名誉と信用を得るために銀行設立の勧誘は固辞する。

P156 貯蓄資本の方策

不慮の大災害時のための資金確保として、西条藩の紙幣3000円を借り入れてその利子を積み立てた。「ちりも積もれば山となる」の諺のとおりである。不慮の急需に備えたものなので本家が自由に使えないように書きつけておいた。

P160 沈殿法

雇い外国人から沈殿法を聞いて以来忘れたことはなかったが、急務の業務が多くて後回しになってしまった。明治13年に着手すると好成績を得た。廃棄物から銅を得る事業は、前途多望と言える。

P162 山根製錬所

明治19年、岩佐巖を招いて、岩佐の考えのもとに山根製錬所で沈殿銅と硫酸の製造に着手した。

(製鉄については触れていない。歴史的には鉱業から工業への転換点にもかかわらず、意外とあっさりと書いている。)

P162 採鉱事業の根本方針

工業の発展には、技師を雇い入れる必要性は感じていたが、坑間事業については学術と実験を併せ持つ技師が少ないので、容易には雇い入れなかった。

全く技師の力を借りず、宰平自ら鉱夫頭等に指示して開鑿事業を拡大して今日の盛況に至らした。ルイ・ラロックを雇い続けたり、学士の所説に一任して漫然従事させていたり、莫大な資金を浪費したりしていたら、見るべき功績もあげられたものではなかった。

鉱山業は他の生産業に比べたら困難なもので、緻密な考察と遠大な計画がいる。自然の恩恵に恵まれただけでなく、人の働きによるところが大きい。明治維新のときに、別子銅山を廃止したり、譲渡したり、また維持しても開発していなかったら今日の隆盛は得られていない。

P170 鉱山鉄道

欧米巡回中で最も刺激を受けたのは鉱山鉄道である。鉱山専用鉄道を利用すれば、運搬の便利だけでなく労費も軽減して利益が増大する。別子山に鉄道を敷設することを計画して明治26年7月に竣工する。

(下部鉄道の完成は明治26年5月、上部鉄道の完成は明治26年12月である。)

P172 製鉄業

岩佐技師から製鉄のことは聞いていたが腑に落ちないでいた。ドイツでは銅鉱石の貧鉱から鉄を採り重要産物となしているのを直接聞いて新規事業に取り組む決意をした。沈殿銅採取の銑鉄は購入していたので、使用量が増加傾向なのでその一部を自前で賄えれば支出を抑えられる。製鉄業育成の機運がおこってきたが、さらに発達させるために杉山昌大を招いた。これも住友家の利益を計るに止まらず、国家の利益に役立たんと考えからである。

製鉄業と鉱山鉄道は欧米漫遊で得たものである。

P172 別子開坑二百年祭

別子開基二百年祭挙行の費用に充てるために、あらかじめ相当の費用を積み立てて、明治23年に挙行了た。

祝宴の席で、アメリカ領事は「連綿と200年も一家が持続経営した鉱山は世

界に例がない」と祝辞を述べた。

百五十年祭に逢い、二百年祭に臨む光榮、高運に感極まり言葉を失う。別子銅山産の銅で作った楠公の銅像を一大記念品として、皇居の二重橋の門外に設置する。神祇に願うところは、二百五十年祭、三百年祭、五百年祭とこれ以上の祝典が開催できるような不滅の名家、長盛の鉱山であってほしいことである。

## 9. おわりに

半生物語は、退職後に書きあげた自伝で、後半部の宰平が住友家で活躍した時期であるために「宰平が……した」との記述が目につく。近代化という歴史のうねりの中で卓越した指導力で引っぱってきた自負の念が言葉となっている。

歴史は人を生むというが、宰平は住友の危機の時代を生き、逸脱的革新性で、独裁的にも評せられたが、明治維新において住友の事業を健全的に発展させた欠かせない人物であった。いかんせん、歴史は移っていて、「全組織を結合する組織者」タイプの経営者が求められるようになっていた。日清戦争のさなか、東奔西走の公望が宰平に住友家の将来に悪例を残さない花道の「依願退職」に1年を要した。明治27年11月15日に退職する。

明治30年以降、宰平は家長・友純家族が生活する須磨別邸のある須磨に隠棲した。番頭・宰平の任に一生を遂げた。

広瀬邸の二階・望煙楼に漢詩が掛っている。

高く一樓を築き、子孫に遺す

此の楼宜しく鉱山とともに存すべし

望煙ただに風致を愛でるにのみならず

報いんと欲す、積年金石の恩

## 日本の近代化とヨーロッパ

日本の近代化の中で、われわれの血となり肉となったある種の要素が、ヨーロッパの文物の中にあった。それを模範と仰ぎ、栄養として、刺激として日本の近代化は成し遂げられた。

取り入れられたもの

頭で取り入れられたもの	思想、哲学、文学、宗教
近代国家の体制確立のための制度	議会や軍隊や官僚の制度
産業革命の波を乗り切る	技術、株式会社や銀行制度

見落とされていたもの

社会生活の規範意識(社会生活のルール)

明治の人は、国家の隆盛と自分の立身出世とが矛盾しない恵まれた状態に置かれていた。国家に役立つということは自分一個の問題とがくっついてた。

## 経済活動の拡大

古典古代 家を中心とする経済

中世 村、町が家を越えた経済の単位 (諸藩)

近代 国民経済と広がり経済政策の担い手は、国家となる

(増田四郎「ヨーロッパとは何か」岩波新書)

**広瀬幸平以下、歴代の総理事が「住友は国家のために営む」は、歴史的にも経済的にも当然のことで、特別の考えではない。**

明治29年(1896)に天竜寺に晋山した峨山禅師は、広瀬幸平のこのうえない友であったので、薩長の攻防で廃墟になった天竜寺を再建するのに奔走した。硯石をした碑が建立されていて、その背面に幸平が天龍寺再建の発端が隷書体で書かれている。